
近森リハビリテーション病院言語療法科

科長 矢野 和美

はじめに

2024 年は、入院配属 18 名、外来配属 3 名（科長・科長補佐含む）でスタートしたが、体調不良によるスタッフの休職と退職が複数重なり、科内での人繰りにかなり苦労した 1 年であった。11 月には病棟の配属人数調整のために 4 階病棟（西ユニットのみ）配属を 1 名のみとし、運用を始め、2025 年につなげることにした。

業務・運営

1. 実績

入院・外来における言語聴覚療法の月別実施単位数を図 1・図 2 に、摂食機能療法（入院）の月別実施件数を図 3 に示す。摂食機能療法の算定は、経口摂取が確立していない患者にとどめ、疾患月リハビリテーションを優先して算定する方針は継続している。

入院部門では、患者のコロナ感染により当該病棟への他階フォローが禁止となり、訓練を休みにせざるを得ない期間が複数回あった上、患者層の変化に伴い ST へのオーダー数の割合が若干減少するなどがあったが、患者 1 人当たりの ST 提供単位数を増やすことで収益減の回避に向けた。実施総単位数は昨年に比べると減少したものの、スタッフ 1 人あたりの収益は昨年とほぼ同等となっている。

外来部門は、全体に患者数が減っているが、社会復帰に向け担当者会への参加や関係機関との対話など社会復帰に向けた支援を適宜行った。

2. 嚥下障害の臨床

嚥下障害の訓練に使用している低周波刺激装置（バイタルスティム）について、効果検証目的に作成したデータ記入表と入力マニュアルの運用を開始した。

また、干渉電流型低周波治療器（ジェントルスティム）のデモ機を試用し、効果についてよい感触を得ているため機器の導入について準備を進めるとともに、効果の検証も行っていきたい。

3. 教育

コロナ禍から長く中断していた高知リハビリテーション専門職大学の石川裕治教授によるスタッフへの臨床指導（週 1 回）を今年再開した。

おわりに

ここ数年は人材不足が慢性的な悩みとなっており、来年は活発な求人活動とともに外部に向けたアピールもしていきたいと考えている。

図1. 2024年 言語聴覚療法実施単位数（入院）

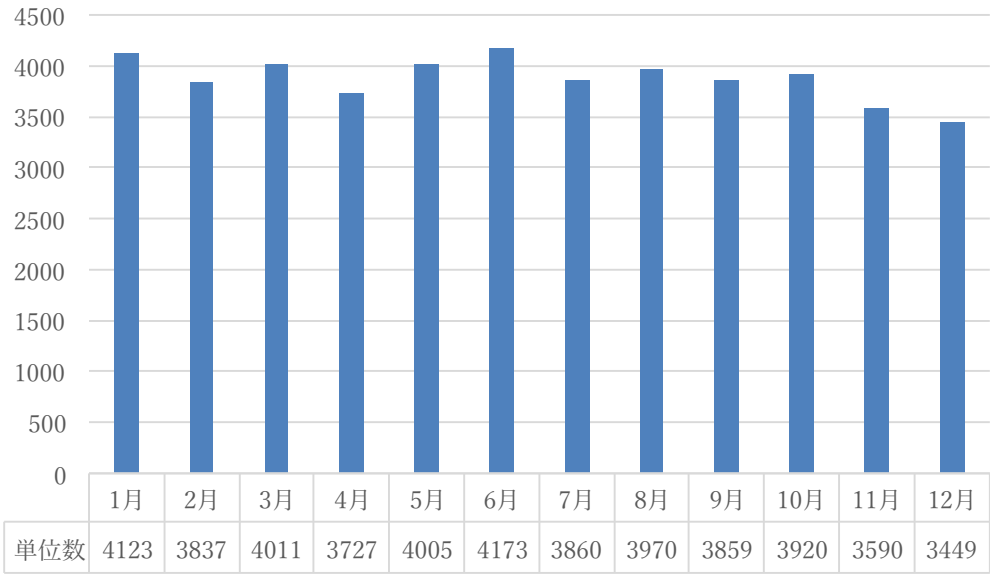
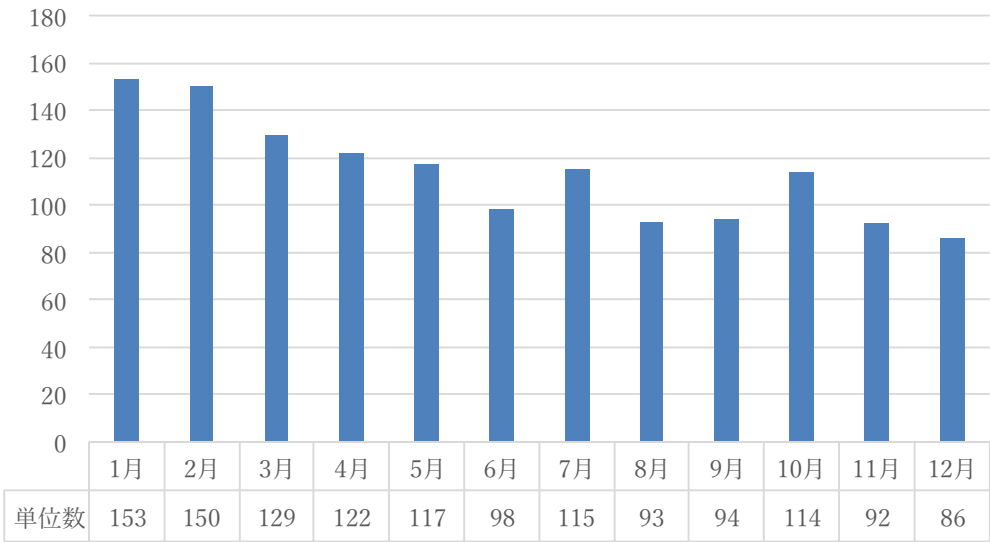
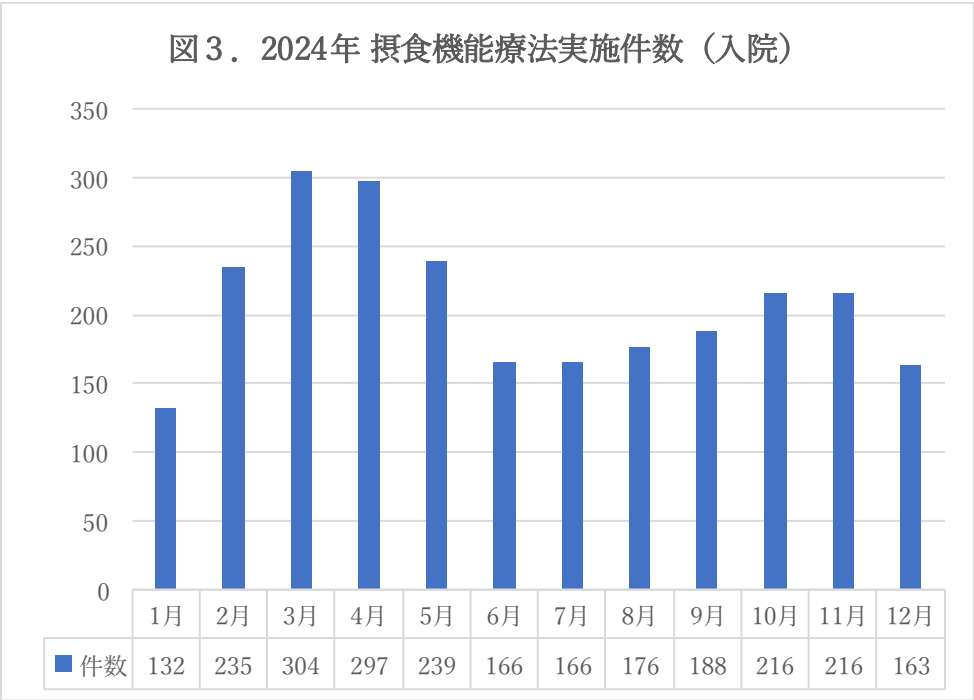


図2. 2024言語聴覚療法実施単位数（外来）





学術発表・講演会等

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
「ブリッジ空嚥下訓練」で食道内 残留が減少した1症例 —退院後も継続して行える工夫を して—	八井田明子 横畠史佳、矢野和美、青山 圭、日浦裕子	第25回日本言語聴覚学会	6月21日 ～22日 神戸